

愛知 28年ぶり 団体柔道

「これが最後」。決勝、中堅戦、近藤克幸は床でからみ合いながら、東京・甲斐の首にすがりついた。その指が二本、えりにかかり、ゲグッと首を締めた。甲斐の手が揺れ、マイッタのサイン。大歓声の中、勝利を告げる「一本」の声がかかった。結果は、有効二つの東京に



柔道競技成年男子の部決勝戦。チームを優勝に導いた近藤克幸選手愛知県武道館で

対し、愛知は先ほうの内村が取った技ありと、近藤のこの一本。愛知が二十八年ぶりの優勝を決めた。「たまたま手が入ってただけですよ。ウチはほかの選手が強いから、自分足引張らないようにと、それだけで……」。主将でもある近藤は、勝敗を左右した一本に頭をかく。だが、その照れ笑いの裏には、この

周りの人たちに感謝したい。十七年間の柔道生活のターニングポイントが、この団体だった。

二好高の教員になって二年目。今年は担任を持つことになりそうだったが辞退して国体に備えた。授業の合間を縫っての限られた練習。そのハインディも乗り越え、最後の最後で勝利をつかんだ。(廿五)

国体を最後に一級級の試合から退く覚悟があった。

難しい体勢からの送り入りで来たんでしょね」。平成元年、鹿屋体大時代に全日本学生選手権71kg級で3位などの戦績を持つ。「でももう限界。ここまでやらせてくれた